

先月で74歳となり、いよいよ老いや死を意識せざるを得ないことにはなってきた。ペーホル・マカシンから今度出す「プロ野球を殺すのぼれた」という新書に「10年後への遺言」というサブタイトルをつけた。

老い……。そういえば、あの大打者もみえない敵との戦いに入ったのか。ワールド・ベースボール・クラシック(WB)の練習試合での不調が話題になっていて、イチロー(アライズ)のことだ。

強化試合も試合で打率1割3分。その数字自体、騒ぐほどのことではない。

チェンジアップ

豊田 泰光

気になるのは打撃の形だ。目の調整過程かもしれない。私のもつた凡々たる打者の手本書ではカマリと変わって打しいイチローに生まれ変わるには余るが、体の使い方が大ち出すと期待する。しかし、過程としての死。

現在日米通算3083安打。年齢を意識。イチローも35歳。張本勲の日本記録、30本に迫っており、シースペースの打者が下り坂を迎えている。

近ごろ、妙にいい人になる。近ごろ、妙にいい人になる。近ごろ、妙にいい人になる。近ごろ、妙にいい人になる。

イチローの新たな「戦い」

つだ。 ^原 _{3.5w} ^原 _{09.5w}

しているのも気になるところ。踏み込むこととしているのかも。しれない。

あれぐらい突き抜けた打者だ。もともとどんがって、打者といつものは小さな死になる。誰も何も言ってく練習試合ごときでガタガタ騒と再生を繰り返しながら、大れないから、自分が頼り。な、といつらにないで、イチローはほかの誰も経験できないイチローではない。

ローだけの孤独がそこにある。野球にはいるような身方があ、現在のスランプを老化ない。やはり野球は深い。

もろく、この不振は独ではなく、一つの死なのだ。(野球評論家)